

京都市山科区 中村 志津（86歳）

昭和16年12月8日真珠湾攻撃を知ったのは国民学校（小学校）2年生の時だった。その日から新聞の第一面は戦争記事で埋められた。当初は日本軍優勢に「ああ一億の胸は鳴る」とか「撃沈撃沈凱歌は上がる」と訳も分からず得意気に歌ったものだ。一方、隣近所の若者は召集令状一俗に言う赤紙一枚で軍隊に召され、否応なく戦地へ送られることになる。送り出す家族や親戚は「名誉」という以外の言葉を封じられ、内心ではどんなにつらく悲しい思いをしたらろう。「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからにゃ手柄たてずに死なりょうか進軍ラッパ聞くたびに臉に浮かぶ母の顔・・・」と歌い、日の丸の小旗を振って、全校生徒が地元の小さな駅まで出征兵士を見送った事も一度や二度ではなかった。

その頃、国民統制のために地域組織の町内会とか隣組が作られ、食糧・衣料品その他生活必需品が配給制度になった。味噌・酢・砂糖、塩に至るまで、家族構成に従い人数に割り当てられた数字入りの紙切れを握りしめ、決められた配給日を忘れず、それぞれの店の土間に並んで順番を待つのは私の役目だった。たった今、買って行った人が再び紙を持って並んでいるのを見て、要領のいい人だなあと子供心に怪しんだり、狡いことのできない馬鹿正直とまで言われた父の顔が過ったり、懐かしさを含んで思い出す。

一方、戦況は意外な方向に進展、開戦1年を経て日本軍はじりじりと形勢逆転に追い込まれ「バシー海峡にアメリカ軍潜水艇が出没」とか、「サイパン島に激戦の末、日本軍玉砕」などの記事に涙した。本土には毎日のようにアメリカの爆撃機B29の襲来。空襲警報のサイレンが鳴り響くと授業は中断され直ちに防空頭巾を被り集団下校で急ぐ途中、2000メートル上空を白い飛行機雲を引きながらB29が名古屋方面を目指して行くのを、唾然呆然と見上げる以外になすすべのない状態だった。軍需工場のある名古屋・大阪のように爆撃の標的となった都市は、一般市民を含め壊滅の被害を被ったが、田舎者の私は目の前で焼夷弾が落とされたものの不発に終わった経験があるだけで過激な場面を直接目にしたことがないのは幸いであった。

我々の学校は都会の集団疎開を受け入れ、大阪のS国民学校の一クラス50人が畳敷きの礼法室を宛がわれたと記憶する。夜になるとすすり泣きが漏れてきたのは10歳そこそこで親元を離れての慣れない田舎生活で心細かったに違いない。運動場は食糧増産の為に開墾せよとの命令で、私は持ったこともない鍬を小さい手に持ち、一振り毎に息を弾ませ耕した後には甘藷の苗を植えて行った。ぐったり疲れて帰宅しても、米飯ではなく代用食のすいとんや蒸し芋という日もあった。腹いっぱい食べたいと何度思ったことか。今では考えられないような生活を小さな子どもにまで強いる戦争を、決して起こしてならない。